明治 39 年に行われた桐古天主堂改修工事における工事費受払の特徴

CHARACTERISTICS OF CONSTRUCTION COST RECEIPTS AND PAYMENTS
FOR THE RENOVATION OF THE KIRIFURU CHURCH IN 1906喜田 信代*, 羽 深 久 夫**
Nobuyo KITA and Hisao HABUKA

The renovation of the Kirifuru Church in 1906, agreed through consultations between Yosuke Tetsukawa and the missionaries, included extension work and ceiling repairs. The renovation was estimated to cost JPY 395, 60, including the construction work for the altar. The amount received was JPY 385, 60, of which JPY 379, 56 and 4 rin were used to pay wages for craftsmen, as well as for meal, travel, and miscellaneous expenses. The church made additional payments toward material and tool costs, either directly or through Yosuke.

Keywords : *Meiji-era, Kirifuru-Church Renovation, Yosuke Tetsukawa, Construction cost receipts and payments*

明治期, 桐古天主堂改修工事, 鉄川與助, 工事費受払

1. はじめに

1-1. 研究の目的

鉄川與助¹⁾は、九州地方の建築職人で、明治39年(1906)に土木建設業鉄川組を創設し、最初の工事として、桐古天主堂改修工事(明治39年/1906)を施工し、以降、継続的に天主堂建築工事を竣工させている。

筆者らは、與助の直筆史料から、桐古天主堂改修工事(明治39/1906)、冷水天主堂新築工事(明治40年/1907)、奈摩内天主堂新築工事(明治43年/1910)、今村天主堂新築工事(大正2年/1913)、ならびに、旧長崎大司教館新築工事(大正4年/1915)の天主堂工事の工事内容、工期、職人構成、建築工事費の内訳、請負契約関係書類、宣教師との関わりについて明らかにしてきた²⁾。

工事費の清算方式は、契約方式と深く関わっていると考えられる。洋風建築は、直営³⁾で出発したとされており、この他、一式請負⁴⁾や、実費報酬加算式⁵⁾で行われたことが明らかにされている。

そこで、本稿は、與助が鉄川組を創業直後の請負である桐古天主堂改修工事(明治39年/1906)の金銭受払について、直接工事費に相当する材料費や道具代、職人手間賃などと、間接工事費に相当する米麦代、旅費、雑費などの内容を整理し、桐古天主堂改修工事(明治39年/1906)における與助の工事費の清算方式を明らかにする。次に、明治期における工事費の清算方式と、與助の天主堂工事における工事費の清算方式を比較検討する。換言すると、與助の工事費受払は、既往の研究で明らかにされている工事費の清算方式と同一なのかどうかを検討することで、與助の工事費受払の特徴を明らかにすることができると考える。

なお、桐古天主堂は、^{きり}桐郷と^{ふるさと}古里郷からなる南松浦郡新上五島町^{きり}桐郷

古里郷^{ふるさと}に建てられていた。桐古天主堂の天主堂名であるが、與助は、自らの工事実績を記した『証明願』⁶⁾や『鉄川工務店工事経歴書』⁷⁾には「^{きり}桐古天主堂」と記しており、工事中の『手帳』①から『手帳』③には、「桐ニ滞在」、「古里ニ安着」、「桐ノ浦天主堂日誌」、「桐天主堂改造金受取」、「桐ノ浦天主堂請負金」などと記している。したがって、與助は、意識して天主堂名を記したというより、地域名や通称を記したものと考えられる。そこで、本稿では、與助が記載している書類名に準じて記載している⁸⁾。

1-2. 研究の方法

與助は、創業直後から受取金と支払金を分けて記している。具体的には、桐古天主堂改修工事(明治39年/1906)では、『手帳』に受取金と支払金を分けて記載しており、支払金が受取金を上回る。冷水天主堂新築工事(明治40年/1907)では、『手帳』に受取金と支払金を分けて記載しているが、材料費と屋根職人の手間賃の支払項目がない。奈摩内天主堂新築工事(明治43年/1910)では、『手帳』と『金銭受払簿』に受取金と支払金を分けて記載し、竣工後に『新築工事費決算書』を整理している。『金銭受払簿』は、受払金を「御方支払」と「私方支払」、および「工用」と「私用」に分けて記載している。「御方支払」は材料費と道具代、職人賃などで、「工用」は米麦代、旅費、雑費と捉えられ、「私方支払」ならびに「私用」は與助の個人的な費用と捉えられる。今村天主堂新築工事(大正2年/1913)では、『手帳』と『新築工事費豫算書』、『工場記録』と『工場簿』のほかに『雑費記入簿』を整理している。『工場記録』と『工場簿』には材料の見積書、注文書、契約書、送り書(納入書)があり、『雑費記入簿』には木工部費、食料費、道具代の受払金の内訳を記載しているが、與助が材料費を支払った記録はない。旧長崎大司教館新築

* 札幌市立大学大学院デザイン研究科
博士後期課程・修士(学術)

Grad. Stud., Graduate School of Design, Sapporo City University, M.A.

** 札幌市立大学大学院デザイン研究科 教授・博士(工学)

Prof., Graduate School of Design, Sapporo City University, Dr. Eng.

工事（大正4年/1915）では、與助は天主堂工事係代人として、『支払伝票』⁹⁾で関係者へ支払をしている。

このように、創業直後から、それぞれの工事毎の記録を整理することで、桐古天主堂改修工事費の受払の状況を把握することができると考える。

2. 史料について

桐古天主堂改修工事（明治39年/1906）の史料は、「書付」¹⁰⁾と、3冊の『手帳』である。『手帳』は、旧暦明治39年1月からの日誌などのほか、桐古天主堂改修工事に関する金銭受払の記載がある¹¹⁾。なお、『手帳』は、與助の五男・故喜一郎氏が所有するものである。

表1は、左列から、No.、書類名、体裁、サイズ、主な記載内容、備考をあらわしている。「書付」は、凡そ同じ記載内容で、『手帳』①と『手帳』③に挟み込まれている¹²⁾。また、『手帳』①の「桐ノ浦天主堂日誌」と、『手帳』③の旧暦明治39年（1906）1月から5月の日誌（以後、桐古天主堂については明治39年の旧暦で記す）はほぼ同じ内容で、『手帳』①の「桐天主堂改造金受取」と『手帳』③の「桐ノ浦天主堂請負金 受取金額」は同じ内容が記載されている。

表 1 桐古天主堂改修工事の工事費関係史料

No	書類名	体裁	サイズ (縦×横×厚)mm	主な記載内容	備考
1	「書付」	半紙二つ折	122×302	拾四個 一窓前 貳百貳拾四日、一鐘ノ土臺 貳拾五日、一塔屋根地造窓 参拾日、一屋根地造り 参拾日、一両方ノ間根太座張り 二階根太座張り 網天井 一貳拾日、壁地造り其他 参拾五日、一壁板張り 参拾日 〆 参百九拾四日、此賃飯料 貳百七拾五円八拾銭、外ニ 一柳天井三個二階手摺り 及階段 内階段ノ材木及人夫丈郷ヨリ支出シ 七拾九円八十銭 合計 参百五拾五円六拾銭	『手帳』①に挟み込まれ、半紙の横方向に長手方向半分に記されており、毛筆書。
2			121×302	十四個 一窓前 貳百貳拾四日、一鐘ヨリ下土臺 貳拾五日、一屋根 一塔屋根地造窓迄 参拾日、一屋根地造り 参拾日、一両方根太座張り 二階根太座張り 網天井 貳拾日、一壁地造り其他雑工 参拾五日、一壁板張り 参拾日 〆 三百九拾四日、此賃飯料 貳百七拾五円八拾銭、外ニ 一柳天井三個二階手摺り 及階段 内階段ノ材木及人夫丈郷ヨリ出シ其他ハ大工ヨリ仕出シ事 七拾九円八十銭 合計 参百五拾五円六拾銭	『手帳』③に挟み込まれ、半紙の縦方向に上半分に記されており、毛筆書。悪戯書がある。
3	『手帳』①	表紙青色欠損	134×80×50	明治39年(1906)1月14日から2月、3月、4月、閏4月(14)と5月3日までの「桐ノ浦天主堂日誌」と、「木挽日誌」、「桐ノ浦天主堂入金」「桐天主堂改造金受取」、「福見」、「鯛ノ浦天主堂」などが記されている。	No.2「書付」が挟み込まれている。
4	『手帳』②	表紙黒色	131×72×12	明治39年(1906)9月から12月の日誌の他に、材料や買物の項目と価格、「冷水天主堂 建築費用」などが記録されている。	
5	『手帳』③	表紙黒色	75×107×13	桐古天主堂日誌は明治39年(1906)正月14日から18日迄である。その他、「曾根」、「桐ノ浦天主堂ノ日誌」、「冷水天主堂日誌」、「桐ノ浦天主堂請負金 受取金額」、「桐ノ浦天主堂工事ニテ賃銭支拂帳」、「冷水ノ部」などが記されている。	No.2「書付」が挟み込まれている。

凡例：①No.1と、No.2の「書付」は、ほぼ同じ内容である。No.2には、後日、書いたと思われるペンの悪戯書きがあることから、写真1は、No.1を用いている。②『手帳』は、明治39年(1906)1月14日から記録され、『手帳』①と『手帳』③には重複する記述がある。③『手帳』は、縦書きで罫線が入り、墨、インク、鉛筆で記され、インクや鉛筆は文字が擦れて判読の困難な部分もある。④5月2日から9月4日までの『手帳』の日誌は、現段階では確認できない。⑤『手帳』は旧暦で記されている。閏4月などの暦があることから、本稿では、與助の史料の通り、旧暦を用いる。

3. 桐古天主堂改修工事見積金

「書付」（写真1）は、「14個の窓前の工事」¹³⁾に224日、鐘より下の土臺造りに25日、塔屋根の窓迄の地造りに30日、屋根地造り30日、両方の間の根太座張り、2階の根太座張りと網天井に20日、壁地造りその他に35日、壁板張りに30日、〆394日で、この手間賃と飯料は275円80銭で、「他に、柳天井3個と、2階手摺り、および階段の材木及び人夫は地元より出す約束で79円80銭で、合計355円60銭」である。したがって、この「書付」は改修工事の人工を表し、見積書に相当するもので、355円60銭は鉄川組の請負金と考えられる。なお、『手帳』②の9月27日に小香台新製40円の追加注文があることから、桐古天主堂改修工事の見積金は395円60銭である。

4. 桐古天主堂改修工事受払金

表2は、桐古天主堂改修工事における金銭受払を時系列に整理したもので、左列から工期、日付、摘要、受取金、支払金を表してい

る。工期は建築工事着手前と建築工事中に分けている。日付は明治39年（1906）で、摘要は該当する項目の要点を示している。受取金と支払金はそれぞれ該当する期日における受払を表している。なお、受取金は現金で、支払金には、與助は支払っていない費用がある。また、與助は明細ごとに記載しているが、筆者は、直接工事費に相当する材料費、道具代、職人手間賃と、間接工事費に相当する米麦代、旅費、雑費（郵便・文房具・消耗品費・酒代など）に分けて整理している。

(1) 受取金

受取金は、宿老¹⁴⁾濱口から現金で受け取っている¹⁵⁾。月別にみると、1月は50円、3月は50円、4月は90円、閏4月は50円、5月は61円、6月は52円、7月は10円、8月は12円60銭、9月は10円である。このうち、4月9日の受取金20円は、木挽賃支払の為の受取金である。したがって、工事着手前の受取金は190円で、工事中の受取金は195円60銭で、工事期間の受取金は385円60銭である。

(2) 支払金

月別の支払金は、1月は61円98銭、3月は275円69銭4厘、4

写真1 桐古天主堂改修工事の「書付」

凡例：『手帳』①と『手帳』③には、ほぼ同じ内容で書かれた「書付」が挟み込まれている。読み下しは、『手帳』③の「書付」を用いているが、これには後日書きこまれたと思われる悪戯書きがあることから、写真は、『手帳』①のものを用いている。

表2 桐古天主堂改修工事における金銭受払

単位(円)

工 期	項 目 月 日	摘要	受取金 現金	支払金						
				直接工事費			間接工事費			
				材料費 與助払 てない費用	道具	職人 手間賃	米麦	旅費	雑費	
工 事 着 手 前	見積もり									
	手付け	50								
	23 汽船賃1円19銭、長崎端舟6銭、神ノ島渡銭(2回)15銭								1.4	
	1 釘その他5円50銭、曲尺4円10銭、尺10銭、鉄13円47銭5厘、その他18円、フルイ49銭	5.5		36.165						
	(全物代(ハリ、ウス、丸ノミ、面鉋、丸鉋、一寸鉋、上砥、チュウノウ、ダンギリ、他に鉋、曲尺、ノミ、混剛砂、硝子5枚、幅8寸尺1寸2歩 注文)			13.56						
	長崎 20銭、不詳2円40銭									2.6
	葉書3銭、餛飩15銭、研チ1円、マンジウ10銭、密柑10銭、人形4銭、帽子38銭、柳行李9銭、大徳寺10銭									2.75
	1月23-29日の長崎買物130円の残金			A						
	21 綿木船賃1円50銭、杉五歩板四坪3円40銭、松七歩板一坪90銭、洋釘代20銭、五廻しの綱縄代80銭、櫓一本代12円、梯一寸三歩2円、柳用松一本代1円、竹62本代(1本7銭5厘 口4厘)15円74銭、木挽法村菊次4日賃1円80銭、福見松代不足分19銭	37.73			1.8					
	有福行旅費25銭、大阪書店前金1円13銭、全上心配料40銭、半紙代10銭、端書切手代20銭							0.25	1.83	
	裸麦1俵2円80銭、白米八斗13円50銭、芋クズ12斤代72銭、煙草代1円、福見木挽米代其他4円76銭4厘、福見松代口口買・酒代他65銭						21.784		1.65	
	20 福見松樞切2日分1円、全上 木挽長作渡1円、全 長作貞次渡5円、福見にて渡1円、樽出し賃40銭				8.4					
	綿木船口の内入1円50銭、								1.5	
	30 木挽4日賃(菊次木割)1円80銭、木挽長作賃3円、全上 三吉賃2円、全 貞次賃10円20銭				17					
	宿老より受取	30								
	30 與助受取(宿老よりの20円・杉寅)20円、福見松代(濱口氏支払い分)19円、竹代(62本)4円75銭、杉120本140円	20	183.75							
	宿老より受取(内に送る)	30								
	1 丸尾行き10円、心配料40銭、長崎買物15円74銭、米代其の他4円76銭、福見松買酒代65銭	15.74							10	0.4
	0.75口へ木挽米代4円69銭6厘							4.76		0.65
	8 杉買酒代56銭							4.696		
	9 木挽賃支払いの為20円	20								0.56
	4 9-23 福見松樞切二日分1円、全上木挽長作貞次渡1円、全上木挽長作渡5円、全上福見ニテ渡1円、樽出シ賃40銭、綿木船口ノ内入1円50銭、木挽4日賃法村菊次1円80銭、木挽長作賃助定済3円、全長三吉賃助定済2円、全貞次賃貫次渡シ10円20銭、全入買物90銭					27.8				
	15 長崎注文妻1俵代(川添方)4円								4	
16 杉山 濱口より40 円	40									
				B						
	4月16日に納入の煉瓦代金			C						
	4月16日に発注した瓦代金									
23 若松芝居1円									1	
1 妻1臥代再建長崎下4円								4		
6 初年度米1臥代5円28銭								5.28		
9 濱口より20円	20									
10 貞次に10円、長三郎に2円、與助 内に送る5円						12			5	
4 15 3年度妻1俵代4円、再度白米1臥代5円28銭							9.28			
	閏4月15日に納入された白灰代硝子障子と丸窓代			D						
				E						
22 長崎で木材買う18円80銭、船1.2	18.8								1.2	
24 父魚目行									5	
30 米代(常助・青方へ米買)30円	30						30			
杉代(祖父追贈の節冷水杉代にて)冷水杉代93円の所52円渡し40円と3円合して勘定済	43.34									
5 1 青方より米4臥代3斗19円20銭、青方米1臥代(外ニ15銭 米値口ノ為)4円95銭、福江ニテ白米三五入一六六ガへ5円81銭、福江ニテ米妻45.5入4円77銭7厘	5						34.737			
3 福見松心配料、福見松の手付金5円、全上根切木挽賃1円、木挽長作へ小使1円、長作貞次へ賃金5円、全上福見ニテ1円、樽出し賃40銭						8.4				
濱口より	51									
9 丸尾にて10円	10									
15 鍛冶屋支払15銭、竹皮草履6銭、全上6銭						0.15			0.12	
26 善吉福江で買物30円					30					
14 証園行の性2円60銭									2.6	
19 宇 二丁代(川上市五巾氏へ注文)95銭					0.95					
足袋一箱(川畑へ注文分)、曲尺一丁(川畑へ注文分)70銭					0.7					
21 妻三斗(川畑へ注文分)3円、竹代(70本)2円80銭	2.8						3			
現金(濱口氏より慶介受理)2円	2									
23 現金(濱口氏宅にて)10円	10									
25 妻(川畑へ4円30銭支払)3円、個人へ注文ノ妻(3斗入1臥)3円							6			
28 旅費(福江行き)5円								5		
現金40円	40									
30 旅費(父丸尾行)4円70銭								4.7		
木挽賃(以前の20と合計44.7(木挽38日の賃))24円70銭						24.7				
5 妻8斗代8円							8			
鍛冶屋支払20銭、細シャツ一枚代28銭4厘						0.2			0.284	
7 10 現金 丸尾にて10円	10									
右首に対する賞金総額(38日半)17円32銭5厘					17.325					
12 左官小遣いとして10円					10					
28 父丸尾、與助土井行1円、全上10円								11		
5 小遣い・切手12銭									0.12	
14 樞松房吉へ送り(為替)、湯川幸太へ支払5円						5				
道具(尺ノコ2枚、鉋1枚、ノミ1本、8歩極薄ノミ1本、ハキリ2本バ)2円52銭4厘、道具12銭				2.644						
8 18 娘妾費(奈良尾芝居見物)10銭、20銭、オヤツ代51銭									0.81	
道具58銭				0.58						
酒一升代30銭、天日木綿五尾代									0.3	
不明20銭									0.2	
27 宮原へ支払い50銭					0.5					
現金 似首にて10円、丸尾にて2円60銭	12.6									
14 奈良尾左官へ						10				
9 濱口より	10									
27 小香台 新製(追加注文)										
29 左官 35日書(天井25日、屋壁10日)						21.2				
日付不詳 魚4斤7銭、醤油 9合代18銭、豆腐 4丁8銭、素麺 1斤 7銭、酒9合39銭口厘、平大口 三斗9銭									4.764	
茶 5合、米斗4円76銭4厘、鯉節35銭、鉄鉋35銭							4.764		0.69	
絹フルイ2円55銭、大徳40銭、東洋36銭、鉄橋側20銭、紐24銭、白皮5銭、不詳75銭、氣船賃1円、紡績2円90銭、端船賃14銭、蜜柑代2銭								1	7.41	
合計			385.6	312.66	A+B+C+D+E	84.599	164.475	140.301	41.05	33.738
					776.823 +A+B+C+D+E					

凡例：①本表は、史料から明らかになる、桐古天主堂改修工事着手前から竣工までの金銭受払を示した。②見積金は、鉄川組改修工事費の見積金である。改修工事の大工手間賃は飯料を含む 275 円 80 銭と、二階及び階段工事の人間賃 79 円 80 銭の合計 355 円 60 銭と、追加工事として祭壇工事 40 円の合計 395 円 60 銭である。③受取金は、現金で渡されている。④支払金は、直接工事費と間接工事費に分けられる。⑤直接工事費は材料代、道具代、職人賃に分けられる。⑥間接工事費は旅費、米麦代、雑費に分けられる。⑦材料費は、1 月 23 日からの長崎買物代残金 A、4 月 16 日に納入された煉瓦代 B と、同日に発注された瓦代 C、閏 4 月 15 日に納入された白灰代 D と、硝子障子代 6 円 99 銭 3 厘と丸窓代 E があり、與助はこれらの費用を支払っていない。

月は69円60銭6厘、閏4月は133円90銭、5月は78円40銭7厘、6月は50円45銭、7月は46円80銭9厘、8月は10円3銭4厘、9月は31円20銭と、日付不詳の14円35銭4厘がある。

支払金は、材料費、道具代、職人手間賃と、米麦代、旅費、雑費に分けられ、材料費は、釘・材木・竹代と、與助は支払っていない買物代である。したがって、工事着手前の支払金は407円28銭、工事中の支払金は369円54銭9厘、工事期間の支払金は776円82銭3厘で、この他に與助は支払っていない買物代がある。

1) 材料費

① 釘・材木・竹代

釘・材木・竹代は312円66銭で、工事着手前は、1月23日から長崎に出張した際の釘その他の買物と、3月21日の材木・洋釘代、30日の松・竹・杉代などと、4月22日に木材代、30日に杉代¹⁶⁾と、工事中は5月3日に松代手付と、6月21日に竹70本代である。

② 與助は支払っていない材料費と買物代

桐古天主堂工事期間の『手帳』の日誌と、工事費の記録には、買物や、材料の納入、および発注などが記されている。與助は、請負後、1月23日から25日まで長崎に出張し、買物をしている。4月4日に、長崎で注文した品物が届き、「惣商130円トナル」と連絡が来る。この記録からは、買物代金の総額も分らないまま発注はしている可能性が伺える。また、16日には、煉瓦が納入され、同日、與助は瓦を注文している。閏4月16日には白灰が納入され、硝子障子¹⁷⁾を新たに注文すると決めている。このように、買物と、納入や発注の記録はあるが、與助が代金を支払った記録はない。そこで、與助は支払っていない買物代は、それぞれ、A（長崎買物残金）、B（煉瓦代）、C（瓦代）、D（白灰代）、E（硝子障子と丸窓代）と表している。

工事は竣工していることから、工事工程に併せて発注され、納入されたと考えられる。なお、長崎市においてFrancis. A. Groomと小山良輔との間に交された住宅の建築工事契約書¹⁸⁾では、ドア・窓・錠戸・鍵・ヒンジ・ボルトなどは建築主から提供されていることから、與助が支払っていない買物代は、教会もしくは宿老から直接関係者に支払われたと考えられる。

2) 道具代

道具代は84円56銭6厘である。内訳は、工事着手前は、1月23日から29日の長崎出張の際の買物（曲尺、尺、鉄、その他と、フルイ）と、金物代（ハリ、ウス、丸ノミ、面鉋、丸鉋、一寸鉋、上砥、チュウノウ¹⁹⁾、ダンギリ、他に鉋、曲尺、ノミ、混剛砂、硝子5枚 幅8寸尺1寸2歩）である。工事中は5月26日に善吉²⁰⁾の買物代と、6月19日に宇2丁、21日に曲尺1丁、8月14日に道具（尺ノコ2枚、鉋1枚、ノミ1本、8歩極薄ノミ1本、ハキリ2本バ）などを購入している。

以上の通り、工事着手前に道具を職人に渡し、工事中は道具を補い、もしくは修理していると考えられる。

3) 職人手間賃

職人は、木挽、鍛冶屋、左官を雇入れており、職人手間賃は164円47銭5厘である。内訳は、工事着手前は3月21日の木挽賃、30日²¹⁾の木挽賃、4月9日の木挽賃で、着手前の職人手間賃は木挽賃である。工事中は、閏4月9日に木挽賃、5月3日に木挽賃、15日に鍛冶屋へ支払、6月30日に木挽賃、7月5日に鍛冶屋へ支払、12日に煉瓦積の左官に賃金、27日に左官へ小遣、8月14日に鉄川組の

湯川幸太²²⁾に手間賃、27日に宮原²³⁾へ支払、9月14日に奈良尾の左官に賃金、29日に左官に賃金である。木挽賃は、3月、4月、閏4月、5月、6月と毎月精算している²⁴⁾。左官には工事終了後に清算している。また、鉄川組は家族と雇入れた職人で構成されるが、8月14日の湯川幸太への支払の他に、家族への支払は確認できない。職人手間賃は、日給で、與助は、木挽と鍛冶屋、左官の手配と管理を行ない、職人に手間賃を渡している。

4) 米麦代

米麦代は140円30銭1厘である。内訳は、工事着手前は、3月21日に裸麦一俵、白米八斗・苧クズ代・福見木挽米代などと、4月1日に米代と、木挽米代、4月15日に麦1俵代である。工事中は、閏4月1日に麦1呎代、6日に米1呎代、10日に麦1俵代・米1呎代などと、30日に米代、5月1日に米麦代、6月21日に麦代、25日に麦代、7月5日に麦代、日付不詳の米代などがある。工事着手前と工事中の米麦代を比較すると、凡そ1:3となることから、工事着手後は着手前の3倍に相当する職人が従事したと考えられる。なお、『手帳』①の3月21日の「木挽ノ食料ハ濱口ニ依頼ス」の記載から、木挽の食糧は別に賄われていることが分かる²⁵⁾。

5) 旅費

旅費は41円5銭である。内訳は、工事着手前の1月の長崎出張の際の汽船賃などと、3月21日の有福行旅費、3月30日の縄本船口の内入²⁶⁾、4月1日は丸尾行き費用である。工事中の閏4月22日は長崎行き、24日の父の魚目行き、6月28日福江行き、30日父の魚目行き、7月28日に父と與助の旅費と、日付不詳の船賃である。工事期間中は、長崎への出張の他、上五島の鉄川組の拠点である魚目町丸尾郷や、中五島の桐古天主堂工事現場の近くの有福島や、下五島の福江への船賃であることから、工事の間は五島列島と長崎市内を往来し、旅費はその費用であることが分る²⁷⁾。

6) 雑費

雑費は33円73銭8厘で、郵便・文房具・消耗品費・酒代である。内訳は、工事着手前は、1月の長崎出張中の買物（葉書、饅頭、マンジュウ、密柑、人形、帽子、柳行李、大徳寺など）と、3月21日の大阪書店前金²⁸⁾や、心配料²⁹⁾、半紙代、端書切手代などと、酒代他、4月1日の心配料と酒代、4月8日に酒代、4月23日に若松芝居見物料³⁰⁾などである。工事中は、閏4月9日に與助の家に送り、5月15日に竹皮草履、6月14日に祇園行き、7月5日に綿シャツ、8月5日切手代など、8月18日に芝居見物と酒代、27日の使途不明20銭、日付不詳の食糧費（魚4斤7銭、醤油9合代18銭、豆腐4丁8銭、素麺1斤7銭、酒9合39銭口厘、平大口 三斗9銭や茶5合、鉄飴35銭）、生活雑貨など（絹フルイ、大徳、東洋、鉄橋側、紐、白皮、不詳75銭、紡績、端船賃、蜜柑代）である。雑費には大阪に注文した書籍や切手代、芝居見物などの娯楽費や酒代の他、與助の出張時の嗜好品代や家族への土産代などと、私用とみなされる費用や遊興費も含まれている。

5. 桐古天主堂改修工事における工事費の精算方法

表3の桐古天主堂改修工事における月別の金銭受払は、左列から工事期間、摘要、受取金、支払金を整理している。工事期間は、工事着手前と工事中で、摘要は該当する月別の要点を表している。

受取金は現金で、支払金は直接工事費（材料費、道具代、職人手

間賃)と、間接工事費(米麦代、旅費、雑費)に分けている。以下に、受取金と支払金の関係について検討する。

(1) 受取金と支払金

工事期間における受取金は385 円 60 銭で、支払金は776 円 82 銭 3 厘で、支払金が391 円 22 銭 3 厘多くなる。この他に、與助は支払っていない買物代がある。

與助は、『手帳』に工事の記録を記しているが、工事請負の後、直接山に入り、山主と交渉し、材木を買付けている。また、材料費については、釘・材木・竹代は宿老から受取り、與助が関係先に支払っているものと、支払っていない材料費(煉瓦・瓦・白灰・硝子障子・丸窓など)があるが、施工に必要な材料費の支払は、教会が行ったと考えるのが順当と思われる。道具代は教会からの受取金は確認できないが、工事着手前に職人の道具を揃えて、工事に備えたものと考えられ、手付金を充当した可能性が考えられる³¹⁾。

請負は鉄川組の飯料を含むもので、祭壇の追加工事費は、その後、修正されていないことから当初の見積で施工されたと考えられる。

鉄川組は桐古天主堂改修工事の着工年である明治39年(1906)に創業しており、建設業者として資金的に潤沢とは考えにくい。そこで、與助は、着手金として手付を受取り、材料費である材木や、組の米代や、鉄川組の拠点の丸尾の費用、娯楽費まで含めた雑費を施主からその都度受取り、支払に充てたと考えられる。與助が支払っていない煉瓦、瓦、白灰、硝子障子・丸窓などの費用は、與助を通すことなく、関係者に教会から支払われたと考えられる。

このような受払の内訳から、與助の受取金385 円 60 銭は、職人手間賃164 円 47 銭 5 厘と、米麦代140 円 30 銭 1 厘と、旅費41 円 5 銭、雑費33 円 73 銭 8 厘の合計379 円 56 銭 4 厘に充てられたと考えられる³²⁾。

(2) 桐古天主堂改修工事請負と工事費の流れ

図1は、桐古天主堂改修工事費の受払の流れを示している。

工事費は、直接工事費にあたる材料費、道具代、職人手間賃と、間接工事費にあたる米麦代、旅費、雑費である。材料費は、與助が山主等と交渉し、直接買付けた材木や竹代312 円 66 銭と、與助は支払っていない買物代Aと煉瓦代B、瓦代C、白灰代D、硝子障子・丸窓代Eがある。道具代84 円 59 銭 9 厘は、最初に大工道具を渡した

表3 桐古天主堂改修工事における月別の金銭受払 単位(円)

工事期間	摘 要	受取金	支払金						
			直接工事費				間接工事費		
			材料費		道具代	職人手間賃	米麦代	旅費	雑費
			釘・材木・竹代	與助は払っていない買物及び納入品代					
工事着手前	1月の金銭受払	50	5.50		49.73	0	0	1.4	5.35
	1月23-29日の長崎買物130円の残金		0	A	0	0	0	0	0
	3月20日-30日の金銭受払	50	221.48		0	27.2	21.784	1.75	3.48
	4月1日-8日の金銭受払	30	15.74		0	0	9.46	10	1.61
	第1回目 勘定	130	242.72	A	49.73	27.2	31.24	13.15	10.44
工事中			292.45+A			82.03			
	4月9日-23日の金銭受払	60	0		0	27.8	4	0	1
	4月16日に納入の煉瓦代金		0	B	0	0	0	0	0
	4月16日に発注した瓦代金		0	C	0	0	0	0	0
	閏4月1日-30日の金銭受払	50	62.14		0	12.0	48.56	6.2	5
	閏4月15日に納入された白灰代		0	D	0	0	0	0	0
	硝子障子と丸窓代		0	E	0	0	0	0	0
	5月1日-3日の金銭受払	51	5.00		0	8.4	34.737	0	0
	第2回目 勘定	161	67.14	B+C+D+E	0	48.2	87.297	6.2	6
			67.14+B+C+D+E			147.697			
	5月9日-26日の金銭受払	10	0		30	0.15	0	0	0.12
	6月14日-30日の金銭受払	52	2.8		1.65	24.7	9	9.7	2.6
	7月5日-28日の金銭受払	10	0		0	27.525	8	11	0.284
	8月5日-27日の金銭受払	12.6	0		3.224	5.5	0	0	1.43
	9月14日-29日の金銭受払	10	0		0	31.2	0	0	0
	日付不詳の金銭受払		0		0	0	4.764	1	12.864
	第3回目 勘定	94.6	2.8		34.87	89.08	21.764	21.7	17.298
総計		385.6	312.66	A+B+C+D+E	84.599	164.475	140.301	41.05	33.738
	397.259+(A+B+C+D+E)			379.564					
	776.823+(A+B+C+D+E)								

凡例：①表は、桐古天主堂改修工事の受取金と支払金を摘要の期間毎に整理したものである。②支払金は、材料費、道具代、職人手間賃と、米麦代、旅費、雑費に分けられる。③材料費は、與助が買付け、支払った釘・材木・竹代と、材料の発注・納入が確認されるが、與助は支払っていない費用があり、長崎買物の残金A、煉瓦代B、瓦代C、白灰代D、硝子障子と丸窓代Eの金額は不詳である。④適用期間における支払合計は、直接工事費397 円 25 銭 9 厘と、間接工事費379 円 56 銭 6 厘の合計で776 円 82 銭 3 厘である。

ものとする。職人手間賃164 円 47 銭 5 厘は、與助が、木挽、左官の作業を管理し、支払っている。

また、米麦代140 円 30 銭 1 厘、旅費41 円 5 銭、雑費33 円 73 銭 8 厘は、與助が支払っている。

(3) 「桐ノ浦天主堂請負金 受取金額」における與助の勘定
写真2「桐ノ浦天主堂請負金 受取金額」は、與助が、受取金の支払内容を記したもので、「第1回目勘定」は4月8日迄で130 円である。その内訳は1月の手付50 円、福見松代19 円、竹62 本4 円75 銭、木挽米代其他4 円76 銭4 厘、雑費に相当する心配料や酒代1 円5 銭、長崎買物代15 円74 銭や、丸尾の費用30 円、現金4 円69 銭6 厘であり、表3の1月から4月1日迄の宿老よりの受取金130 円の明細であることが判る。「第2回目勘定」は4月9日から5月3日迄で51 円である。その内訳は長崎行きの20 円、若松芝居見物の1 円、青方へ米買に行く為の常助の受取30 円であり、表2の濱口よりの20 円と、米代に符合する³³⁾。5月9日以降の「第3回目勘定」は94 円 60 銭で、木挽賃、鍛冶屋へ支払、左官に賃金や小遣と、鉄川組の湯川幸太等の職人賃に充てられている。このような受払から、與助は、工事に必要な費用を、その都度注文者である教会や、宿老から受け取っていると考えられる³⁴⁾。

6. 天主堂建築工事における工事費清算の方法

表 4 は、桐古天主堂改修工事から旧長崎大司教館新築工事における建築工事と受払の概要を表している。表は左列の下段方向に工事概要を表し、右方向に古い順から桐古天主堂改修工事（明治 39 年/1906）、冷水天主堂新築工事（明治 40 年/1907）、奈摩内天主堂新築工事（明治 43 年/1910）、今村天主堂新築工事（大正 2 年/1913）、旧長崎大司教館新築工事（大正 4 年/1915）を表している。

(1) 工事費清算の推移

1) 冷水天主堂新築工事（明治 40 年/1907）

冷水天主堂新築工事は、桐古天主堂改修工事の最中に、宣教師から依頼され、煉瓦造と木造を検討したうえで、木造で新築することに決まり、「木挽の不足の件については神父（曾根で病床中の神父）が補う」と仲裁を受け³⁵⁾、大工木挽手間共 400 円、その内大工の費用 325 円、木挽の費用 75 円で、桐古天主堂改修工事の竣工直後に着手している。

工事費は受取金 335 円 61 銭 2 厘で、支払金は 321 円 12 銭 2 厘である。工事着手前に道具一年分を渡しているが、材木代と瓦代と屋根職人賃、および次亜燐 1 本代四十銭、金剛砂代は與助は支払っていない。

2) 奈摩内天主堂新築工事（明治 43 年/1910）

奈摩内天主堂新築工事は、與助の野崎島での木材買付けから始まっている。工事費は決算金額 6,720 円 86 銭 9 厘で、その内訳は、材木之部、石之部、煉瓦之部、左官之部、木工之部、塗物之部、硝子之部、金物之部、鋼鉄天井の材料費、職人手間賃、運搬費と、諸道具ノ部、職人賄雑費、諸雑費の 12 項目に分けて整理している。瓦代は、左官之部で決算されていることから、屋根工事は左官が行ったものと考えられる。請負金は木工之部の大工・木挽手間賃 1,560 円で、木挽手間賃を含んでいる。また、與助は、工事費を「御方支払」と「私方支払」、および「工用」と「私用」に分けており、「御方支払」は材料費、道具代、職人手間賃で、「工用」は米麦代、工事雑費などである。「私方支払」および「私用」は與助の個人的な費用と考えられる。工事終了後に大久保金物店への支払金 5 円を受取っている。與助は工事費を教会から受取、その都度、支払に充てている。

3) 今村天主堂新築工事（大正 2 年/1913）

今村天主堂新築工事は、奈摩内天主堂新築工事竣工後に、鉄川組一同が、福岡県の今村天主堂工事現場に移動し、工事に着手している。今村天主堂新築工事は、地盤工事に予想を超える事態があり、基礎工事の材料の追加の発注を繰り返している。

工事費は、假設工事費、土工事費、煉瓦工事費、石工事費、木工事費、金物工事費、屋根工事費、漆喰工事費、塗物工事費、硝子工事費、雑工事費、雑費の 12 項目に分けて材料費と職人手間賃を合算して見積り、『新築工事費豫算書』は 21,723 円 33 銭である。その後、基礎工事などの追加工事により、工事着手後に『工場記録』で 22,077 円 61 銭 5 厘と修正している³⁶⁾。また、『雑費記入簿』には、材料費と職人手間賃以外の支出を、木工部費、食料其他、道具費に分けて記帳している。木工部費は鉄川組の職人賃と木挽賃のほか、丸尾への送金、出張交通費・宿泊費、電報・郵便の通信費、職人及び家族の衣服費、芝居見物や温泉の娯楽費・病院代が含まれている。なお、

写真 2 『手帳』③「桐ノ浦天主堂請負金 受取金額」

しくは、補修用としての支払と考えられる。木工部費、食料其他、道具費を併せて受取金は 3,771 円である³⁷⁾。

與助は、工事着手前に、地質調査を行い、大杉柱を買付け、松杭木を発注し、さらに杭木を追加注文し、洋釘を発注し、地盤改良のため焼過煉瓦とセメント、火山灰を買付け、工事中は、瓦、石材、木材の発注や契約を繰り返している。なお、木材は業者から與助が直接買付け、瓦代も與助が支払っているが、煉瓦代と石材代、および地盤改良の材料費と洋釘代は、與助は支払っていない。この他、與助は、材料と施工に従事する職人を手配し、石工、煉瓦工、左官の職人手間賃は與助を通して支払われている。

したがって、與助が業者から直接買付けた木材代と瓦代は、與助を通して支払われているが、與助は支払っていない費用は、教会から直接、関係先に支払われたと考えられる。

4) 旧長崎大司教館新築工事（大正4年/1915）

旧長崎大司教館新築工事は、明治43年（1910）から検討され、大正2年（1913）に着手している。司教館工事は、司教館の基礎工事ともなる地下室³⁸⁾ 工事と、司教館裏手の整地作業で出来た土地に、小使住宅と便所並びに湯場を新築する工事を含んでおり、司教館本館を新築する工事である。

與助は旧長崎大司教館の天主堂工事係代人として従事し、発注者の立場で請負業者と、見積書、契約証、仕様書、請負者心得、一式請負人心得書と証書式、建築材料納方請負人心得書と証書式、建築材料運搬請負契約証、注文書などの請負契約関係書類を取交し、工事を管理している。工事实績のない業者からは、保証金と保証品を預かり、工事終了後には、保証金を返している。

工事費は、仮設工事、運搬工事、煉瓦工事、石工事、木工事、金物工事、瓦工事、塗装工事、硝子工事、雑工事、左官工事の11の工事項目³⁹⁾ と、その他の費用である便所・湯場・門番所、小使住宅、廊下・階段工事、保証金、神父、葬具庫/御像台と、妻のトサに渡した費用⁴⁰⁾ に分けて整理しており、教会は「支払伝票」により、材料費や職人手間賃、建築材料納方と運搬請負の費用を業者に支払っている。與助の代人としての報酬は、史料からは不詳である。

(2) 工事費清算の経緯

桐古天主堂改修工事（明治39年/1906）では、鉄川組の請負金は最初に決めている。材料費のうち與助が直接、山主などと交渉し、買付けている材木代などは、與助が直接現金で支払、その他の煉瓦、瓦、白灰、石材、金物や硝子障子などは、発注を與助が行い、支払

表4 桐古天主堂改修工事から旧長崎大司教館新築工事における建築工事受払の概要

工事名 工事概要 工事種別 構造 規模/階数 工事 着手前 着手 竣工 建築 工事費 請負金 追加 予算書 受取金 支払金 決算金	桐古天主堂改修工事	冷水天主堂新築工事	奈摩内天主堂新築工事	今村天主堂新築工事	旧長崎大司教館工事 本館工事 新築 煉瓦造
	天井改修・増築 木造を一部煉瓦造に 200㎡/2階 M39.1.14 M39.3頃 M39.11.10頃 355円60銭（大工・木挽手間、飯料含） 祭壇工事40円 385円60銭 776円82銭3厘 776円82銭3厘	新築 木造 260㎡/2階 M39.3.19 M39.12.15 不詳(M40.7頃) 大工・木挽手間共400円 (大工325円、木挽75円) 335円61銭2厘 321円12銭2厘 721円12銭2厘	新築 煉瓦造 480㎡/2階 M41 M42.4 M43.8.17 大工・木挽手間賃1,560円(決算) 祭壇工事 4372円62銭 3654円39銭 6,721円33銭	新築 煉瓦造 495㎡/2階 M43 M45.2 T2.9.18頃 大工・木挽手間賃4,362円50銭 (予算) 基礎工事に追加工事発生 21,723円33銭 不詳 不詳 凡3万円を超える金額	825㎡/地下1地上3 M43 T2の入梅より前 T4.4 鉄川與助の代人数料(金額不詳) 煉瓦と材木の発注。 教会は、「支払伝票」で、材料費や職人手間賃、建築材料納方と運搬請負の費用を業者に清算している。與助は、工事係代人として、「支払伝票」を確認している。 『見積書 但し住家栳坪数拾五坪』『見積書 但し便所栳坪数拾八坪六合七勺』『請負者心得』『小使住宅及学校附属便所並二湯場一式請負人心得書』『小使住宅及学校附属便所並二湯場一式請負証書』『学校附属便所並二湯場仕様書 大浦天主堂』『建家売買契約証』『領収書』『一、材料納方請負証書』『二、材料納方請負証書』『煉瓦石買入注文書』『材料納方請負証書式』『石材買入注文書』『建築材料運搬請負証書』『大浦天主堂 司教館 積入明細書』『見積書』『生石灰購買注文書』『砂買入注文書』『瓦納方請負契約証』『瓦注文書』『預り証』『支払伝票』 仮設工事、土工事、煉瓦工事、石工事、木工事、金物工事、瓦工事、塗装工事、硝子工事、雑工事、左官工事、便所・湯場・門番所、小使住宅、廊下・階段工事、保証金、神父、葬具庫/御像台、妻のトサに渡した費用 ①旧長崎大司教館新築工事は、司教館本館工事の前に、司教館の基礎工事ともなる地下室工事と、司教館裏手の傾斜地を造成し、整地作業で新たに出来た土地に、小使住宅(建坪15坪)と便所並びに湯場(建坪18坪6合7勺)を新築する工事を含んでいる。この他、建屋1棟の解体工事を含んでいる。②與助の、天主堂工事係代人としての手数料は、現在の処は、不詳である。
工事着手前の発注など	大工に道具箱一年分を渡す。杉材を買付。	大工に道具箱一年分を渡す。松、杉、檜を買付。	野崎島で奈摩内用材買付。煉瓦を発注。	地質調査。木材の買付。松杭木240本注文。焼通煉瓦6万個、セメント120樽、火山灰150俵、並煉瓦22万個、上煉瓦11万個、石灰、洋釘を注文。	煉瓦と材木の発注。
支払金の特徴	煉瓦代、石灰代、瓦代、硝子障子・丸窓代、長崎買物の残金は、與助は支払っていない。	材木代と、瓦代、次亜燐代、本代四十銭、金剛砂代と、屋根職人手間賃は與助は支払っていない。	支払金は、「御方支払」(材料費、道具代、職人手間賃)と、「工用」(米麦代、工事雑費)と、與助の私的費用である「私方支払」と「私用」に区分されている。	地質調査費と、煉瓦代と石材代、および地盤改良の材料代と、その他の材料代と洋釘代、および職人手間賃は、與助は支払っていない。	
工事費に関する記載のある書類	『手帳』、『書付』	『手帳』	『手帳』、『金銭受拂簿』、『新築工事費決算書』	『手帳』、『新築工事費予算書』、『工場記録』、『雑費記入簿』	
工事項目	大工工事、木挽工事、左官工事	大工工事、木挽工事	材木之部、石之部、煉瓦之部、左官之部、木工之部、塗物之部、硝子之部、金物之部、鋼鉄天井の材料費、職人手間賃、運搬費と、諸道具ノ部、職人賄雑費、諸雑費	仮設工事、土工事、煉瓦工事、石工事、木工事、金物工事、屋根工事、漆喰工事、塗物工事、硝子工事、雑工事、雑費	
備考	①工事着手前に、工事内容と、請負金を「書付」に整理している。②左官は、煉瓦工事と、漆喰工事をしている。	①工事中の受取金には肥後調査費150円を含む。	①「金銭受拂簿」は、工事費を「御方支払」と「私方支払」、ならびに「工用」と「私用」に分けて整理している。②「金銭受拂簿」は、文字が擦れて判読困難な箇所がある。受取金と支払金は、判読可能な範囲で記している。③瓦代は、「左官之部」に含まれていることから、瓦工事は左官が行ったものと考えられる。④工事終了後に、大久保金物店への支払金5円を教会から受取っている。⑤祭壇工事の金額は不詳である。	①基礎工事で追加工事発生。②『雑費記入簿』は読取困難な箇所がある。③『雑費記入簿』には、工事竣工後に500円の受取金があることから、受払の調整金と考えられる。④決算金額は、125周年記念誌編集委員会編：今村信徒発見125周年記念誌 今村カトリック教会p.96,1992.111による。	

凡例：①本表は、桐古天主堂改修工事から旧長崎大司教館新築工事までの、建築請負の概要と、建築工事費の受払について整理している。②建築工事費は、桐古天主堂改修工事から今村天主堂新築工事は現金の受払で、旧長崎大司教館新築工事は、「支払伝票」で清算されている。③工事項目は、奈摩内天主堂は「新築工事費決算書」、今村天主堂新築工事は「新築工事費予算書」に整理したもので、旧長崎大司教館新築工事は「支払伝票」に、漢数字と工事内容を記している。漢数字は、田中豊太郎編（辰野金吾、妻木頼黄博士、三橋四郎の閲覧）：和洋建築工事仕様設計実例 上・下：工業書店建築書院、1905、および1908の出典史料に記載されている漢数字と工事項目が一致することから、與助は、本書を参考にしたものと考えられる。

を教会が直接行っていると考えられる。また、與助は工事着手前に道具を鉄川組職人に渡ししている。煉瓦工、左官、石工などへ渡す賃金は、教会から受取、與助を通して職人に支払われている。

冷水天主堂新築工事（明治 40 年/1907）では、最初に鉄川組と木挽の請負金を決め、與助は受取金で杉材を買付けている。この他に、瓦代と次亜燐 1 本代四十銭、金剛砂代と、屋根職人の手間賃は與助は支払っていないことから、教会が直接、関係先に支払ったと考えられる。

奈摩内天主堂新築工事（明治 43 年/1910）では、請負金は大工木挽手間賃 1,560 円で、工事費を「御方支払」と「私方支払」、もしくは、「工用」と「私用」に分けている。「御方支払」は材料費、道具代、職人手間賃で、「工用」は米麦代、工事雑費などで、「私方支払」と「私用」は與助の個人的な費用と捉えられる。與助は、工事費を教会から受取、支払に充てている。

今村天主堂新築工事（大正 2 年/1913）では、請負金は大工・木挽手間賃 4,362 円 50 銭の予算である。與助は、業者から直接買付けた木材代と、瓦代を支払っているが、その他の費用は、教会から直接、関係者に支払われたと考えられる。石工、煉瓦工事、左官の職人手間賃は與助を通して支払われている。

旧長崎大司教館新築工事（大正 4 年/1915）では、與助が天主堂工事係代人として、「支払伝票」で確認し、教会が材料や施工、工手間や材料納方、運搬請負などの費用を支払っている。

このように、天主堂建築工事における工事費は、最初に鉄川組の請負金を決め、工事着手前に大工に道具を渡し、與助が直接、関係者と交渉して現場で買付けた材木代や、職人手間賃などは與助を通して支払い、その他の材料費は、教会から直接関係先に支払われたと考えられる。なお、教会は、「支払伝票」を用いることで、現金の受払による間違いを防ぐことができたと考えられる。

與助は、材料を安く購入し、職人の手配や管理をして手数料を取る訳ではない。しかし、材料や職人を與助が手配することで、間違いを減らし、工事は管理しやすく、工事費の未払いなどのトラブルは避けられるといえる。

7. 明治期に行われていた工事費の清算方式における桐古天主堂改修工事の工事費清算方式の位置付け

直営方式は、建築主が工事を元請業者に依頼せず、自ら労務、材料、施工機械類の調達と施工管理を行う方式である。一式請負は、建築主は棟梁に施工を一任する契約で、建築代金の総額を請負代金として定め、建築工事は下請業者に請負わせる方式であり、工事代金は一式で、その内訳が分からないことから不正があっても見つけにくい欠点がある。このように一式請負の欠点も指摘されているが、明治 20 年（1887）当時には、凡そ 80% が一式請負に切り替わっている⁴¹⁾。なお、英吉利法律学校の一式請負契約書では、「第十九條 請負人ハ左項ニ從ヒ建築師ノ承諾書ヲ得テ金圓ヲ受取ルコトヲ得ルモノトス則チ 側石迄落成ノ後 請負金高 五分一、ニ階梁置渡ノ後 全 五分ノ一、小屋梁配置ノ後 全五分ノ二、皆落成ニテ 全 五分ノ一、但シ双方協議ノ上建築師ニ於テ相當ト認ムルトキハ右金圓受取期限ヲ伸縮スルコトアルベシ」と、工事の進捗によって工事費を受取ることが決められている⁴²⁾。また、実費報酬加算式は、工事の施工者は注文者の委任を受け、注文者に代わって工事を施工し、

これに要した費用は、「利益をこめない実際の費用だけを建築主に負担せしめ、これと同等に従来の利益に替えて、自分の労務に対して適当なる報酬を建築主に出して貰う」方式で、「請負人は手数料を得て、損失を招かしむることなく」と、その都度注文者から受取、工事の進捗を図る方式である⁴³⁾。

與助は、明治期に魚目水産学校新築工事（明治 40 年/1907）、ならびに若松村立尋常小学校新築工事（明治 45 年/1912）を施工している⁴⁴⁾。後者の書類には「若松村立尋常小学校 一式請負人心得書」があることから、工事は一式請負で施工されたと考えられるが、工事費の受払に関する史料は未確認であり、不詳である。

桐古天主堂改修工事（明治 39 年/1906）は、最初に工事工程や見積金を示して、大工手間賃と米麦代などを含めた鉄川組の請負金を決めている。材料費の内、與助が直接買付けた木材は、教会から受取、與助を通して支払っている。また、煉瓦、瓦、白灰、石材、金物や硝子障子などは、與助が発注しているが、支払はしておらず、與助は職人の手配や管理を行い、手間賃は支払っているが、その管理料は受取っていない。このほか、間接工事費にあたる米麦代、旅費、雑費に至るまで教会にその内訳を伝え、その都度費用を受取り支払に充てている。

このような桐古天主堂改修工事（明治 39 年/1906）の金銭受払は、直営でも、一式請負でもないと考えられる。最初に工事工程や見積金を示して、大工手間賃と米麦代などの鉄川組の請負金を決め、支払の内訳を施主に明示したうえで、その都度受取っている点は、実費報酬加算式と類似しているが、材料費などに與助が支払っている費用と、施主が支払ったと考えられる費用があること、予算書や支払明細書、決算書や領収書が完備されていないことから、実費報酬加算式とはいえない。

明治 37 年（1904）は日露戦争が勃発し、明治 40 年（1907）頃は株価が暴落し、大正 5 年（1916）は第一次世界大戦が始まっており、物価は大きく変動している⁴⁵⁾。建築工事は、長い工事の期間を要するが、並行して起こる物価の変動に際しても、教会から直接工事費が清算されることで、與助は損失の不安が少なくなると考えられる。

8. まとめ

桐古天主堂改修工事（明治 39 年/1906）は、鉄川與助が教会から依頼されたもので、天井改修に伴う増築工事で、改修工事の内容は宣教師との打合によるものであった。與助は、最初に工事工程や見積金を示して、大工手間賃と米麦代などの鉄川組の請負金を決めている。桐古天主堂改修工事費は、支払の内訳を施主に明示したうえで、その都度受取っている。

桐古天主堂改修工事の見積金は、祭壇工事を含めて 395 円 60 銭である。受取金は 385 円 60 銭であり、與助は、受取金を職人手間賃と米麦代、旅費、雑費の 379 円 56 銭 4 厘に充てている。この他に、教会は材料費を直接、もしくは與助を通して関係者に支払っていると考えられる。桐古天主堂改修工事費は、支払合計 776 円 82 銭 3 厘と、教会から直接支払われた材料費などの合計である。

與助は鉄川組創業直後の桐古天主堂改修工事（明治 39 年/1906）で行った、始めに鉄川組の請負金を決め、工事着手前に大工に道具を渡し、與助が直接関係者と交渉して現場で買付けた材木代や、職人手間賃などは與助を通して支払い、その他の材料費は教会から直

接関係先に支払う方法をその後の天主堂新築工事でも行っていた。

與助は、材料を安く購入し、職人の手配や管理をしても、手数料を取る訳ではない。しかし、與助が、材料や職人を手配することで、間違いを減らし、工事は管理しやすく、工事費の未払いなどのトラブルは避けられるといえる。また、材料費など、工事費は、教会から直接、清算されることで、工事期間中の物価の変動に対しても、與助の損失の不安が少なくなるという利点があった。

謝辞

史料の提供者である故鉄川喜一郎氏に心から感謝致します。

注

- 鉄川與助（1879～1976）は、明治 12 年（1879）長崎県南松浦郡魚目村似首郷（現長崎県南松浦郡新上五島町丸尾郷）に大工鉄川與四朗（生年不詳～1939）の 6 男 1 女の長男として生まれる。長崎県南松浦郡稷津尋常小学校卒業後、稼業の大工を手伝い、明治後期から昭和期にかけて、地元である長崎県五島や九州本土において、洋風建築である教会建築や学校建築、寺院、一般建築を多数、設計、および施工している。また、明治 39 年（1906）土木建設業鉄川組設立。明治 41 年（1908）日本建築学会入会（準員）。與助は大正 2 年～12 年（1913～1923）魚目村村会議員を務め、昭和 19 年（1944）は鉄川組を第一土建社に統合し、昭和 24 年（1949）鉄川工務店に名称を変更している。昭和 34 年（1959）7 月は建設大臣表彰、11 月は黄授褒章受章、昭和 42 年（1967）11 月は勲五等瑞宝章を受章し、建築家として評価を受けている。與助夫妻は、晩年は喜一郎氏と同居し、昭和 51 年（1976）7 月 5 日横浜市内にて没している。このような鉄川與助の建築経歴については、『私たちの歩み ―株式会社鉄川工務店経歴書―』（以後『鉄川工務店工事経歴書』）や、與助本人からの聞き取りにより一部が明らかにされているが、その他、筆者等の研究には、與助の五男鉄川喜一郎氏の協力のもと、戸籍簿、位牌、および菩提寺である玩海寺の確認により裏付けされたものである。なお、既往の研究では「鉄川與助」の漢字表記を「鉄川与助」としているが、本研究では戸籍に基づいて「鉄川與助」と表記する。
- 喜田信代、羽深久夫：鉄川與助の明治期の建築経歴と桐古天主堂の請負内容，日本建築学会計画系論文集第 566 号，pp. 161～167，2003。4。喜田信代、羽深久夫，本間博文：冷水天主堂における鉄川與助の請負内容，日本建築学会計画系論文集第 568 号，pp. 133～139，2003。6。喜田信代，羽深久夫，本間博文：奈摩内天主堂における鉄川與助の請負内容，日本建築学会計画系論文集第 578 号，pp. 147～154，2004。4。喜田信代，羽深久夫，篠野志郎：今村天主堂建築工事における九州地方の建築建職人・鉄川與助による施工管理の実態，日本建築学会計画系論文第 650 号，pp. 947～954，2010。4。喜田信代，羽深久夫：旧長崎大司教館における建築工事の実態，日本建築学会計画系論文集第 703 号，2039～2049，2014。9。喜田信代，羽深久夫：明治 39 年に行われた桐古天主堂改修工事の内容，技術報告集，2015。10 掲載予定。
- 直営は、建築主が工事を元請業者に依頼せず、自ら労務、材料、施工機械類の調達と施工管理を行うことをいう。明治初期の洋風官庁建築がこの方式によって行われた。彰国社編：建築大辞典 第 2 版（普及版），彰国社，p. 1077，1998。4。
- 請負契約については、多くの研究がなされているが、本稿では、以下の書籍を参考としている。一式請負は、総額確定請負ともいわれ、代価の総額を請負代金として定める請負。彰国社編：建築大辞典 第 2 版（普及版），彰国社，p. 86，p. 932，1998。4。脇山広三：建築施工，実業出版株式会社，廣済堂，p. 13，2004。2。
- 実費報酬加算式請負については、多くの研究がなされており、その呼称も実費報酬加算式（北村正光：明治工業史 建築編（上），龍溪書舎，pp. 252～256，1994。11）、実費報酬加算式施工契約制度（稲垣栄三：日本の近大建築その成立過程，鹿島出版社，p. 201，1996。6）、報酬加算式建築施工契約制度（山下寿郎：報酬加算式建築施工契約制度，彰国社，pp. 3～4，1966。7）、実費清算（関建世：近代日本建築学発達史 復刻版第 3 編施工，文生書院，p. 407，2001。12）、実費清算方式（博物館明治村編：明治村建造物移築工事報告書（6）（重要文化財旧三重県庁舎），博物館明治村編，1990。3）とされている。実費報酬加算式は、工事の施工者は注文者の委任を受け、注文者に代わって工事を施工し、これに要した費用は、その都度注文者より交付を受け、工事の進捗を図るものである。

- 『証明願』には、3 種類の証明項目がある。その 1 は、鉄川與助はカトリック教会建築技師となるため、明治 33 年から 6 年間、佛人宣教師 A. ベルー師に建築設計学を、ドロ師に建築構造学の個人教授を受けていたことを、カトリック教会司祭の中田藤吉が証明している。その 2 は、明治 39 年 3 月から昭和 25 年 10 月の間の 44 件で、その内主なカトリック関係建築は 40 件の主なカトリック関係建築工事（明治時代 8 件、大正時代 10 件、昭和時代 22 件）の証明で、カトリック司教代理の古川重吉が証明している。その 3 は、その他の建築工事 4 件（奈留島村役場漁業組合事務所、奈留島避病舎、魚目小学校、得雄寺）の工事実績の証明で、それぞれの施主が証明している。『証明願』で証明されている日付、昭和 25 年 8 月から 12 月は、1 級建築士制度が取り入れられた時期と考えられ、『証明願』はそれに併せて取得されたものと考えられる。喜田信代，羽深久夫：『証明願』における鉄川與助の建築経歴，日本建築学会大会学術梗概集，pp. 353～354，2002。8。
- 『鉄川工務店工事経歴書』（『私たちの歩み ―株式会社鉄川工務店経歴書―』，鉄川工務店，1968。）は、鉄川與助の主な経歴と、明治 39 年（1906）の鉄川組創業から昭和 42 年（1967）10 月竣工までの 355 件の工事実績が、発注者・施工場所・工事名・設計施工の別・構造・用途・竣工に分けて整理されている。なお、『鉄川工務店経歴書』には、発行所、および発行年は記載されておらず、長崎電通で作成したと伝えられている。しかし、昭和 42 年（1967）10 月竣工までの工事実績が記載されていることから、この後の発行と捉えられる。なお、與助は、昭和 42 年（1967）に勲章を受けていることから、これに併せて作成されたと推測される。そこで、本研究では昭和 43 年（1968）発行としている。
- 「天主堂既設届」（明治33年/1900）の天主堂名は「聖ペトロ堂」であり、現在の教会名は「桐カトリック教会堂」（昭和33年/1958）である。
- 『支払伝票』は、表紙は一部破損又は全部が欠損しており、寸法は（縦 130×横 187×厚 8mm）で 1 冊に 100 枚が綴じられている。右側（縦 130×横 53×厚 8mm）は「第 號、金、右金御渡被下度候也、年月日、殿」と印刷され、ミシン目が入り切り離せる様式である。左側（縦 130×横 138×厚 8mm）は控で「年月日、第 號、金、姓名、摘要」と記されている。伝票の控部分の最初の頁には、鉛筆で、時系列に①から⑩の番号と、「司教館」と記され、日付、支払先、支払目的が記されていることから、司教館工事の工事費が精算されていると考えられる。「小切手」に類似しているが、金融機関名や小切手の振出地が記入されていないため、「小切手」ではない。なお、「支払伝票」とは、書類の整理上、筆者がつけた名称である。
- 「書付」は、書類整理の都合上、筆者がつけた書類名である。「書付」には、工事項目と人工、および請負金が記されている。
- 天井改修工事の依頼があった旧暦明治 39 年 1 月 14 日は、新暦では 2 月 7 日である。竣工とは明記していないが、工事に関する記載は旧暦 11 月 10 日（新暦の 12 月 25 日）迄である。
- 『手帳』①と『手帳』③には、ほぼ同じ内容で書かれた「書付」が挟み込まれている。読み下しは、『手帳』③の「書付」を用いているが、これには後日書きこまれたと思われる悪戯書きがあることから、写真は、『手帳』①のものをを用いている。
- 窓前の工事とは何を差すのかは、詳細には記載されていないが、窓枠や、窓の框、窓の建具の下枠などの窓周りの工事と考えられる。
- 宿老。①長年経験を積んで熟練した老人。藤堂明保編：学研漢和大辞典，学習研究社，p. 362，1978。3。「寛文 5 年（1628）、キリスト教徒の入島を禁止する御札が立てられ、（中略）身元の知れない者には、いっさい宿を貸さない（後略）」。内藤莞爾：五島列島のキリスト教系家族，弘文堂，p. 18，1979。2。宣教師時代に宿を提供しお世話をしていた人で、教会のリーダーの役割。現在では経済評議員と呼ばれ、主任司祭を助け教会のために尽力する立場である。（長崎カトリックセンターからのご教示による）。
- この他に、7 月 11 日に「濱口氏宅にて□□行費 100 円」と受取金 100 円があるが、これは旅費および調査費で、桐古天主堂改修工事の費用ではない受取金と考えられることから、桐古天主堂改修工事費には含めない。
- 閏 4 月 30 日の支払 43 円 34 銭は（祖父追膳の節 冷水杉代 93 銭の所 52 円渡し 40 円と 3 円合して勘定済）で、冷水杉代も勘定されている。
- 6 個の硝子障子の価格は、「1 一円三十四銭、2 一円三十四銭、3 一円二十六銭三厘、4 一円十銭、5 八十三銭、6 一円十二銭」と記されている。
- 幕末、外人建主と日本人職人との間に交された建築工事契約書（英文）は、1861 年 5 月 13 日に、Francis. A Groom と小山良輔との間に交された

- 工事契約書で、11 項目の契約事項が記載されている。ここでは、全てのドア・窓・錠戸と、鍵・ヒンジ・ボルトと硝子などの材料は、F. Groom 氏より提供されとの契約である。山口光臣：長崎の洋風建築, 長崎市教育委員会, pp. 90-92, 1967. 3。
- 19) チュウノウとは何か、現時点では不詳である。
- 20) 善吉は、桐古天主堂改修工事で大工として従事している。喜田信代, 平井聖, 本間博文, 羽深久夫：桐古天主堂・冷水天主堂・奈摩内天主堂・今村天主堂における関与した人々と鉄川與助の役割, 2005 年度日本建築学会大会学術梗概集 (近畿), pp. 199~200, 2005. 9。
- 21) この 8 円 40 銭については、3 月 30 日の前に記載されていることから、当該欄に記載している。
- 22) 湯川幸太は家族ではないことから、お盆である 8 月 14 日に 5 円渡されたものと考えられる。
- 23) 宮原の役割については、現段階では不詳である。
- 24) 木挽は、竣工月の 11 月にも柱や壁板の工事を行っているが、桐古天主堂改修工事費としての精算は確認できない。引き続き、冷水天主堂新築工事と同じ木挽が従事していることから、次の工事と通算して精算された可能性が考えられる。
- 25) 木挽は、「木挽の作業場は厩場 (りんば)、その手間賃は厘代 (りんだい) と称され、大工手間賃より高いのを原則とした」(彰国社編：建築大辞典第 2 版, 彰国社, p. 582, 1998. 4) とあることから、木挽の食事は鉄川組職人とは別に賄われたと考えられる。
- 26) 「縄本船口の内入」は内金と思われるが、「縄本船口」は不詳である。
- 27) 4 月 1 日の丸尾行き費用 10 円、7 月 28 日の父と與助の旅費 11 円は、旅費としては額が大きいことから鉄川組に渡す費用が含まれていると考えられるが、ここでは裏付けがとれないことから、記載の通り、旅費として扱う。
- 28) 3 月 21 日の支払の大阪書店前金は、大阪市東区唐物町四丁目石川書店に、『議事録ノ二巻』、『木造洋館詳細雛形集 第 1—5 輯』(三橋四郎編；高橋仁太, 1900 年)と、『木造洋館雛形集 上下』(吉原米次郎編；建築書院, 1897 及び 1898.) 三冊を代金 5 円 25 銭で注文している。
- 29) 「心配料」とは、お世話になった人たちへの心付けと思われる。
- 30) 工事着手前や、丸尾の祭、8 月の盆などには芝居見物など娯楽費の出費があり、組の仕事にメリハリをつけていたものと考えられる。
- 31) 桐古天主堂改修工事の後に着手する冷水天主堂新築工事 (明治 40 年/1907) では、最初に大工道具 1 年分を渡している。
- 32) 受取金は 6 円 34 銭多くなるが、この金額は工事費の受払で許容範囲と考えられる。
- 33) 同じ期間の受取金は、この他に、4 月 16 日の杉山での 40 円と、5 月 3 日の 51 円の 91 円あるが、與助の勘定に含まれていない理由は不詳である。
- 34) 與助は、「第 1 回目勘定」、「再度目勘定」と「その他」としているが、整理の都合上、筆者は「第 1 回目勘定」、「第 2 回目勘定」、「第 3 回目勘定」としている。
- 35) 仲裁とは、何らかのもめ事に対する解決の方法といえる。冷水天主堂新築工事は煉瓦造と木造を検討した上で木造に決まった経緯がある。「木挽の不足は神父が補う」との記載から、請負金のうち、木挽賃に相当する費用は足りないことが最初から分ったうえで、継続して教会建築工事を請負なかで、木挽賃の不足は補うとしたものと推測されることから、そのまま記載している。
- 36) 決算金額は與助の史料からは不詳であるが、125 周年記念誌編集委員会編：今村信徒発見 125 周年記念誌, 今村カトリック教会, p. 96, 1992. 11 には、凡 3 万円とある。これは基礎工事の使工事によるものと考えられる。
- 37) 『雑費記入簿』は、文字が擦れて読み取りできない箇所もあることから、合計金額は、3,771 円を超すものと考えられる。
- 38) 與助は、史料に「地中室」と表記しているが、司教館地下室のことだと考えられることから、本稿では地下室と表記する。
- 39) 田中豊太郎編 (辰野金吾、妻木頼黄博士、三橋四郎の閲覧)：和洋建築工事仕様設計実例 上・下：工業書店建築書院, 1905、および 1908 では、工事項目を、それぞれ数字で表している。支払伝票には「一から十六」の漢数字が書き分けられている。これは、司教館工事における工事項目をあらわしていると考えられ、與助は、既に、この文献を参考にしてしていると考えられる。
- 40) 與助の妻トサの費用は、松江商店の買物代金である。トサは、桐古天主堂改修工事以降、工事現場に同行して賄いなどに従事していることから、それらの費用と考えられる。

- 41) 明治 20 年 (1887) 当時、建築学会会員の新築工事における設計者と請負者の状況が記されており、それによると一式請負は、東京、仙台、富山、宇都宮、大阪、京都、滋賀、名古屋、熊本と全国に拡がっている。『建築雑誌』(18870928) 雑報, 本文 pp. 140-141。
- 42) 英吉利法律学校 (中央大学の前身) (明治 20/1887 年 7 月~明治 22/1889 年 12 月) は、辰野金吾の設計で、日本最初の工事請負契約書をつくった。本文の抜粋は、以下の文献の p. 69 から転載している。清水建設百五十年史編集委員会：清水建設 150 年史, pp. 68-69, 1953. 11。
- 43) 実費報酬加算式の事例は、長野県松本市の開智学校 (明治 6 年/1873) と、三重県津市にあった旧三重県庁舎 (明治 12 年/1879) などが明らかにされている。長野県松本市の開智学校の工事費明細の工事明細書については、重要文化財旧開智学校本館移転修理工事事務所編：重要文化財旧開智学校本館移転修理工事報告書, 松本市教育委員会, 1965. 3 がある。参考資料の 1. 開智学校建築関係史料、2. 明治 8 年立石清重提出の開智学校新築仕様帳、3. 明治 29 年風水害修理見積書並びに請負証の詳細な記録があり、実費精算方式の実態が判る。重要文化財旧開智学校本館移転修理工事事務所編：重要文化財旧開智学校本館移転修理工事報告書, 松本市教育委員会, 1965. 3。旧三重県庁舎は、大工の家業を継いだ清水義八 (1846-1914) が、明治 9 年 (1876) 10 月、三重県庁日給雇となり、その後、県営繕関係の仕事に従事している。三重県営繕資料等に含まれる、2「県庁新築山切下費清算帳」、3「県庁新築仕様綴」、4「県庁新築補足受渡簿」、5「県庁補足金高簿」、6「県庁新築別途官金受渡簿」、以下・・・・、23「県庁舎建築工事一件」までの書類と、「県庁御新築清算帳」の書下し、ならびに、「明治十一年ヨリ全十二年ニ至縣廳新築仕様書綴 営繕係」以下の写真資料から、詳細な工事の内訳、伺高、清算高、請負人と出納簿や、稟議などから、明治初期における実費精算方式の実態と提出書類の内容が判る。博物館明治村編：明治村建造物移築工事報告書 (6) (重要文化財旧三重県庁舎), 博物館明治村編, 1990. 3。
- 44) 魚目水産学校新築工事の史料は、「魚目水産学校新築仕様設計書」、ならびに「魚目水産学校断面図」と「魚目水産学校平面図」である。また、若松村立尋常小学校新築工事の史料は、「若松村立尋常小学校新築工事仕様書」、ならびに「若松尋常小学校新築平面図」と「教員住宅平面図」、「若松尋常小学校新築工事費豫算書仕譯書」、「若松村立尋常小学校 一式請負人心得書」である。いずれの書類にも署名・押印はないことから写と捉えられる。工事は、一式請負の施工と考えられるが、書類内容からは、工事費の受払については不詳である。
- 45) 物価の変動に関しては、近代米価表を参考にしている。それによると、明治元年 (1868) の物価指数を 100 とすると、明治 39 年 (1906) は 273、大正 5 年 (1916) は 538 である。

CHARACTERISTICS OF CONSTRUCTION COST RECEIPTS AND PAYMENTS FOR THE RENOVATION OF THE KIRIFURU CHURCH IN 1906

Nobuyo KITA and Hisao HABUKA***

* Grad. Stud., Graduate School of Design, Sapporo City University, M.A.

** Prof., Graduate School of Design, Sapporo City University, Dr. Eng.

The renovation of the Kirifuru Church in 1906 was an extension work associated with the repair of the ceiling of the church building as requested by the Roman Catholic Church. Yosuke Tetsukawa discussed the details of the construction work with the missionary in charge, to whom the construction schedule and estimates were presented for budgetary approval.

Yosuke negotiated with mountain owners and purchased timber with cash. He placed orders following which the church made the payment for material such as bricks, roof tiles, white ash, stones, ironware, and glazed sliding door. Prior to the commencement of the construction work, Yosuke provided tools to craftsmen affiliated with Tetsukawa Gumi. The church funded the wages that Yosuke paid to the bricklayers, plasterers, and stone masons.

The renovation was estimated to cost JPY 395.60, including the construction work for the altar. The amount received was JPY 385.60, of which JPY 379.56 and 4 rin were used to pay wages for craftsmen, as well as for meal, travel, and miscellaneous expenses. The church made additional payments toward material and tool costs, either directly or through Yosuke. The cost of the renovation work was the sum of the total amount paid, i.e., JPY 776.82 and 3 rin plus the material and other expenses the church paid for directly. Yosuke determined the contract amount based on carpenter and sawyer wages. Cedar timber was purchased on accounts receivable on behalf of the church for the construction of the Hiyamizu Church (1907). Furthermore, the church made direct payments for the roof tiles, hypophosphorous acid, and emery powder, as well as roofers' remuneration. The carpenter and sawyer wages were estimated at JPY 1,560. The construction costs were classified as "Your Payment" and "Our Payment" or "Construction Purposes" and "Private Purposes" for the construction of the Namauchi Church (1910). The "Your Payment" account consisted of material and tool costs as well as craftsmen wages, and the "Construction Purposes" account consisted of meal and miscellaneous construction costs. The other two accounts were considered to have been for Yosuke's personal expenses.

An unforeseen situation arose during the construction of the foundation, which resulted in additional construction work, as well as secondary reviews of material for the new construction of the Imamura Church (1913). The contract amount was JPY 4,362.50 for the carpenter and sawyer wages. Yosuke paid for timber and roof tiles that were purchased directly from vendors; all other expenses were paid for directly by the church. Wages for stone masons, bricklayers, and plasterers were paid through Yosuke. He verified the "payment slip" as an agent for the person in charge of the church's construction work, and the church made payment for material, construction work, wages, deliveries, transportation contracts, etc.

The payment method adopted by Yosuke for the Kirifuru Church renovation work—determining the contract amount for Tetsukawa Gumi, his direct intermediary role in payments for timber negotiations and purchases as well as craftsmen wages, and the Church's direct payments for other material costs—was also adopted for construction of other new churches thereafter.

(2015年3月10日原稿受理, 2015年6月22日採用決定)